

聖書:イザヤ書6章1~13節

説教:この切り株こそ、聖なる裔

はじめに

今日から主の御降誕を待ち望むアドベント（待降節）に入ります。待降節とはなにか。三つの漢字がその意味をよくあらわしています。待は待つ、降は降りてくる、節はシーズン、あるいは期間。つまり、救い主イエス・キリストが天から人となられて下りてこられるのを待つ期間。では、なぜ私たちは毎年この季節に待降節を過ごすのか。単なる習慣ということではなく、ちゃんと意味がある。旧約聖書の時代の人々は、アブラハムから数えれば二千年間にもわたって主が来られるのを待ち望んでいました。それに倣って、私たちはもう一度主を待ち望む信仰を思い起こしていく。そのような意味がある。それからもう一つ。主は二千年前にすでに来られました。でもそれで完了したのではない。この方は終わりの日にもう一度来られて、私たちを神の国に迎えてくださるとも約束してくださっています。ですから私たちはいま、主がもう一度来られるのを待っているわけです。ふだんは忘れがちですが、この季節にもう一度思い起こしていく、そういう意味も込められています。

それで今年のアドベントは、旧約の人々がどのようにして主を待ち望んでいたのか、そのことを振り返るために三回にわたってイザヤ書を開いていく予定です。

1 時代背景

1) 南王国ウジヤ王

そこでまずイザヤの時代の様子から見ていきましょう。1節の「ウジヤ王が死んだ年」とあるところが手がかりになります。ウジヤは別名アザルヤともいい、南王国ユダの十代目の王で紀元前740年に死んだことがわかっています。その頃イスラエルは北王国と南王国に分裂し、北王国はイスラエル、南王国はユダと名乗っていましたが、どちらも吹けば飛ぶような小さな国に過ぎません。当時の大国アッシリヤが北の方から虎視眈々と狙ってきます。それでとうとう紀元前722年に北王国は滅ぼされていく。イザヤが預言者として召されたのは、まさにそれが起ころうとしていた頃だったということになります。

2) アッシリアとエジプトにはさまれて

南王国の人たちはそれを目の当たりにした。それに加えて、南のエジプトもユダ王国を狙ってきた。北と南、両方からはさまれるようにして圧力をかけられていた。当然のことですがみな不安を覚えるし、政治的にも難しい舵取りを迫られる。イザヤが預言者として活動していたのはそんな時代でした。

2 召命

1) 主に出会う

ところで預言者とは何者なのかです。神のみことばをあずかって、神に代わってイスラエルの民に語る、それが預言者です。神に選ばれた者だけしかありません。誰でもなれるのではない。では、どのようにして神に選ばれていくのか、今日の所を見ると三つのステップがあります。

まず一つ目のステップ。1節後半です。「私は、高く上げられた御座に着いておられる主を見た。」なぜイザヤが主を見ることになったのか、聖書には何も書かれていません。聖書に登場するあらゆる信仰者に共通して言えることですが、いつも神が突然のように一方的に現れて、主に出会うこととなります。厳しい修行をしたからとか、みそぎをして身をきよめたので神を見ることができた、ではない。この後見るようにイザヤは唇の汚れた者であると言わなければならないほど、罪を自覚していた。そんな者にも主は現れてくださり、預言者として召していく。これは不思議としか言いようがありません。神が一方的に選ぶ。これが第一のステップです。

2) 罪の告白と赦し

続いて二つ目のステップ。イザヤは高く上げられた御座に着いておられる主を見て、またセラフィムが「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主」と呼んでいるのを耳にします。そのときイザヤはこう言った。5節、「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の主である王をこの目で見たのだから。」

「唇が汚れた者」とはなにか。マタイの福音書15章18、19節でイエスはこう言われました。「口から出るものは心から出て来ます。それが人を汚すのです。悪い考え、殺人、姦淫、淫らな行い、盗み、

偽証、ののしりは、心から出て来るからです。」心のなかのことはほかの人には見えませんから、そこにどんなひどいものがあったとしても、誤魔化して生きていきます。けれども神に出会ったとき、もはやそうはいきません。本当の姿が露わにされます。それが「唇が汚れた者」という意味です。

神に出会ったらどうなるか。昔から、神を直接見た者はその場で死ぬと言われていました。たとえば、モーセの場合であれば、「モーセ、モーセ」とミディアンで神から呼ばれたとき、すぐに顔を隠したのはそのためです。死んでしまうから。イザヤは顔を隠す暇もなく、おまけに主のお姿から聖い光が輝いています。それで自分の罪が浮かび上がってきます。

このことは、人が自分の罪を自覚する様子をよく表しています。汚いところにいたときはほとんどわからないのです。ところが、きよいものに触れた途端、一瞬にしてわかる。自分は死んでしまうと思うほど、ひどい罪の姿が見えてくる。私もかつてそうでしたが、多くの人「私は罪人ではない」と言います。それは、ただきよいものを知らないから言えるわけです。

イザヤが死を覚悟した次の瞬間、不思議なことが起こりました。7節。「見よ。これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された。」

これのまねをして炭火をおしつけてみようという人はいないでしょう。やけどしてしまいます。イザヤは霊的な世界のことをことばで表しています。燃えさかる炭火と言っても、それは熱い炭火ではなく、きよめる働きをするものとして「炭火」と言っています。炭火に触れることによってイザヤの罪は赦されていく。炭火がなんであるかはまた後で触れることにして、とにかくイザヤは驚いた。罪を自覚し死ぬしかないと感じた次の瞬間、あなたの罪は赦されたと言われたのです。助かった、どん底から救われた。自分は本当に生きる者に変えられたという感激が湧いてきたと思うのです。これが第二のステップです。

3) 私を遣わしてください

三つ目のステップ。神が「だれが、われわれのために行くのだろうか」と問いかけられたとき、イザヤは「私を遣わしてください」と手を挙げ、ます。どうしてイザヤは手を挙げたのでしょうか。ヨハネの福音書に、町の人たちから相手をされずいた罪深いひとりの女性が登場します。この女性はイエスに出会って救われたとき、喜びのあまり、あんなに冷たくしていた町の人たちにイエスのことを伝えに走り出していく。イザヤが経験したのはそれと同じです。救われた喜びを伝えたい。このことをほかの人々にも伝えたい。そうしたいと思って手を挙げた。このようにイザヤは三つのステップを踏んで預言者として召し出されていきました。

この教会もいま後任の牧師を求めているところです。どんな人が来るのか、誰も分からない。しかしイザヤのことからわかることがある。主が召し出す者は、必ずいま見たような三つのステップを踏んでいく。主に出会い、罪を告白し、赦されて、そして主の召しに応答していく。そういう人だということです。このことはみなさん覚えていただきたいと思います。

3 いつまでですか

1) 切り株が残る

さて、今日の箇所で見えないことが一つあります。9, 10節。「行って、この民に告げよ。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな』と。この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を固く閉ざせ。彼らがその目で見ることも、耳で聞くことも、心で悟ることも、立ち返って癒やされることもないように。」イザヤは福音を告げようとしています。ところが、それを否定するようなことばがここにあります。どうしてこのようなことを言うのか。神が意地悪だからではありません。むしろ、人間の側に問題があるからです。イザヤが言うとおりに、民たちの唇は汚れています。これからイザヤは生涯にわたって神のさばぎと罪からの救いを語っても、人々は悔い改めようとしません。見ようとせず、聞こうとしなかった。その結果、町々が荒れ果てて住む者がいなくなり、土地手見捨てられていった。神がそうされたのではありません。罪を悔い改めない者たちが、自分の手でそうなるようにしてしまったということです。

将来こうなると、神はわかっています。普通ならどうしますか。まるで穴のあいたぎるに水を入れるようなものです。なんの成果もない。私なら諦めるでしょう。しかし主は諦めません。心が頑なに汚れていて立ち返ることがなかったとしても、それでもイザヤを召し出して、主の救いのことばを語り続けていきます。

2) 炭火である主イエス・キリスト

しかし世はますます悪くなって行きます。北も南も滅ぼされ、神の国はどこにもなくなる。焼け野

原が広がり、木が倒されてだれも住む者がいない。そんな状態になっていく。イスラエルの歴史をたどると、まさにこのとおりにになっていく。しかしそれで終わりではなかった。よく目をこらしてみると、そこにみばえのしない切り株が残っていました。13節後半にこうある。「この切り株こそ、聖なる裔。」

説明が必要です。聖なると呼ばれる方は神だけです。裔とは、今はあまり使いませんが、子孫のことです。もう役にも立たなくて見捨てられたかに見える切り株の中に、聖なる神である方の子孫が芽生えていく。いったいだれのことか。やがて、イザヤ書の中で明らかになっていくことですが、やがてこられる救い主イエス・キリストを指します。

イザヤの唇に炭火が当てられたとき、彼の咎は取り除かれ、罪は赦されました。この炭火はいったい何者なのでしょう。ここにはイエス・キリストという名前は一切出て来ません。でも罪を赦すことのできる方はただお一人しかいない。私たちの救い主、イエス・キリストです。イザヤは救い主に会ったということです。それも、唇というからだのなかで最も敏感で繊細なところに触れた。私は、イザヤがこの時神が私たちの罪のために後を捨ててくださろうとしていることを一瞬にして悟ったのだらうと思うのです。

イザヤのこの出来事からおよそ740年後、主イエスがマリアを通して人となられて私たちのところに来られました。その間、人々は待ち続けます。気が遠くなるような待ち方です。いまはスマホで素早く答えを求める時代です。若い人たちは、とろとろ待つのが苦手になっているそうです。だからこそ、私たちはもう一度待つことの大切さをこの季節に覚えたいと願います。

目の前の不安やこれからのことへの恐れ、先が見えないときがあります。問題が解決しないで長引くようなとき、「主よ、いつまでですか」と問いたいときがあります。でも私たちは絶望しなくてよい。イザヤを通して語られた主の約束はそのとおりに実現したのです。ならばこれから先のことも主は約束のとおりになされる。そのことを私たちは知っています。

ともに主の御降誕を待ち望んでまいります。